

## ジャポニズムから世紀末の憂鬱へ

—— 19 世紀末のオーストリアにおける日本観 ——

竹中 亨

### 1. はじめに

異文化イメージ論は、近年、歴史研究で好んで取りあげられるテーマである。文化的他者について人々がいかなるイメージを抱き、またそれがどのように変遷したかを跡づける作業は、歴史学の一つのジャンルとして確立した観がある。

異文化イメージを論じる場合、一つの重要な論点は、それを規定する要因はどのようなものかという問題である。いうまでもなく、どの文化や民族に対してもわれわれは等しく好（あるいは悪）感情を抱くわけではない。つねに憧憬をもって語られる国もあれば、逆に隔意がぬぐえない国もある。また、その感情は恒久不変のものではない。時代の経過とともに、せつかくの好感も薄れたり、あるいは不快感に変わったりもする。このように、好悪の別を引きおこし、また時代的な変化をもたらす要因は何かということが、研究上の一つの焦点となっている。

その場合、要因は主客双方の側にあると考えるのが妥当である。つまり、他者イメージは一方で、対象となる他者の客観的態様に左右されるが、他方ではそれを見る主体の側での認識上のバイアスによっても変わるということである。もっとも、主客がそれぞれどの程度の重みをもつかについては、にわかに断定しがたい。ただ研究者の間では、主体的要因を重視することで、おおよその意見の一致がみられるようである。つまり、他者についてどんなイメージをもつかは、他者自身の姿そのものよりも、まずはみる側がそこに何を見てとろうとするかに左右されると考えるわけである。その典型はサイドである。オリエンタリズムを論じるにあたって、彼はオリент・イメージの言説構造に分け入ることに集中し、現実のオリентとの照応はいっさい問わないというほどに徹底している<sup>(1)</sup>。

(1) E・W・サイド『オリエンタリズム』板垣雄三 / 杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1993 年、上巻、26 頁。

筆者は、言語論的アプローチには与しないが、主体的要因をやはり重視すべきだという点では異論はない。たとえば、イメージが時代的に変遷する場合、変遷の契機は他者そのものが変化したためというよりも、むしろ他者を眺める自分が変化したためであった。つまり、自分が国際世界のなかで、あるいは当該の異文化圏との関係においてどういう位置を占めるか（あるいは、それについての自分自身の了解）が変わったために、相手の姿を違ったふうに見るようになったのである。

ドイツの対日観を題材に、この点を具体的に論じているのがマティアス・パウアーの研究である。彼女は、日本イメージを明治から第二次大戦まで跡づけ、その変遷を分析した。それによれば、ドイツの対日観は大きく3つの時代に分けて考えることができる。第1期は、1871年から日清戦争期までで、日本について肯定的イメージが支配的であった。いわく、日本人は秩序正しく、清潔好きであり、また親切で礼儀正しい。同時にまた、ユーモアを解し、陽気で人生に肯定的である。さらに、知的水準が高く、鋭敏な美的感覚を備えているというのである。こうした一連の属性は、その後日本観が変遷するなかでも、日本イメージの基本要素として長く保持されたと、マティアス・パウアーはみる。

しかし、1890年代半ばからの第2期には、日本観にはっきりとした変化が生じる。好意的姿勢が冷める一方、警戒的な口吻が現れるのである。一因としては、明治政府に雇われていた「お雇い外国人」——そのなかには多数のドイツ人が含まれていた——が、このころ多く契約満了となって、日本を去ったことが挙げられる。しかしそれ以上に重大なのは、アジアを舞台に両国の対立関係が表面化したことである。日本は日清戦争を機に国際舞台に登場したし、ドイツは「世界政策」下でアジアへの関心を強めた。そして、三国干渉に見るごとく、日独の利害が正面衝突する事態も生じたのである。こうした事態が日本観に影響しないわけがなかった。それまで日本人の美質と目されていた点が、今では欠点と見られるようになった。なかには、黄禍論を根拠にした反日的な論調も現れたのである。

第3期は、第一次大戦後から1930年代初までである。この時期は当初、種々の日本イメージが併存した。第1期と同様の肯定論もみられる一方、黄禍論も依然として根強かった。しかし、1920年代末には親日派の影響が強まり、日独の精神的紐帯が強調されるようになった。それとともに、日独は明治以降、一貫して友好関係にあったとの虚像が生まれたのである。そして、1930年代に登場したナチスは、日独同盟関係を優先する観点から、黄禍の概念を禁止する一方、プロパガンダ用に美化された日本像を作りあげたのである。

以上のように、マティアス・パウアーは、ドイツでの日本観をそのときどきの日独双方での政治・経済状況、さらに国際関係における両国の位置に関連づけている。彼女の見解は、基本線において多くの研究者の賛同を得るものと考えられるが、ただ、イメージの変遷を説くうえで、

---

(2) Regina Mathias-Pauer, „Deutsche Meinungen zu Japan: Von der Reichsgründung bis zum Dritten Reich“, in Josef Kreiner (ed.), *Deutschland - Japan: Historische Kontakte*, Bonn 1984. なお、戦後におけるドイツの日本観についても、同様に政治経済関係の反映が見られる。それについては、中埜芳之 / 楠根重和 / アンケ＝ヴィーガンツ『ドイツ人の日本像——ドイツの新聞に現れた日本の姿』三修社、1987年参照。さらに現代までのドイツ人の対日観の通史として、中埜芳之『ドイツ人が見た日本——ドイツ人の日本観形成に関する史的研究』三修社、2005年。

政治経済的情勢をあまりにストレートに反映させているきらいがある。主体を取りまく社会的現実という要因に注目する場合、もっと幅広い観点から把握する必要があるのではない。

その点、日本イメージにおける主体的要因を考えるうえで興味深いのが、オーストリアの事例である。というのは、ドイツの場合と対比してみると、そこには類似点と相違点の双方が認められるからである。一方で、両国はドイツ語という共通のコミュニケーション手段をもち、同一の歴史・文化圏に属していた。日本イメージに関しても、ドイツとオーストリアで共通していたとしても、不思議はあるまい。しかし他方、当時の世界のなかで、あるいはまた東アジアとの関係において、国家としてのドイツとオーストリアの占める位置は相当異なっていた。オーストリアは盛りの過ぎた老大国であり、しかもヨーロッパの外にほとんど足場をもたなかった。この点、イギリスの世界的覇権に挑戦する新興強国ドイツとは決定的な差があった。

本稿は、こうした問題意識に立ちながら、19世紀中葉から第一次大戦までの時代に、オーストリアにおいてどのような日本観が存在していたかを明らかにし、その変化の原因について考察を行う<sup>(3)</sup>。分析にあたって素材として使ったのは、19世紀後半のオーストリア人による日本旅行記である。

## 2. 分析素材について

本稿が利用したのは、以下の旅行記12点である(年代順)。選定にあたっては、パンツァーによる日奥関係史の概説に大きく依拠したことを断っておきたい<sup>(4)</sup>。

- ① Scherzer, Karl v., *Fachmännische Berichte über die österreichisch-ungarische Expedition nach Siam, China und Japan 1868-1871*, Stuttgart 1872 [以下、Scherzer と略記。]
- ② Hübner, Alexander Graf v., *Ein Spaziergang um die Welt*, Leipzig 1874 [ただし、本稿では1891年の第7版を用いた。以下、Hübner と略記。なお、同書には以下の部分訳がある。『オーストリア外交官の明治維新——世界周遊記「日本篇」』市川慎一 / 松本雅弘訳、新人物往来社、1988年。]
- ③ Doblhoff-Dier, Josef Frhr.v., *Tagebuchblätter einer Reise nach Ostasien 1873/74*, 3 vols., Vienna 1875 [以下、Doblhoff と略記。]
- ④ Deisenhammer, Carl, *Meine Reise um die Welt*, Vienna 1882 [以下、Deisenhammer と略記。]
- ⑤ Lanckoronsky-Brzezic, Karl Graf, *Rund um die Erde 1888-1889: Geschautes und*

---

(3) 管見のかぎりでは、日奥関係についての歴史的研究はこれまで乏しい。下記のパンツァーの概観と、彼とクライサの共著が挙がるのみである。なお、本稿でいうオーストリアとは、いわゆるドイツ語圏オーストリアであって、当時のオーストリア・ハンガリー帝国全体を指すものではない。

(4) P・パンツァー『日本オーストリア関係史』竹内精一 / 芹沢ユリア訳、創造社、1984年、77頁以下。なお、下記のリスト中のA・フィッシャーは、来日に際して妻フリーダ Frieda を伴っており、フリーダも訪日旅行記を書き残している。F・フィッシャー『明治日本美術紀行——ドイツ人女性美術史家の日記』安藤勉訳、講談社、2002年。ただ、フリーダはオーストリア生まれかどうか確認できなかったため、本稿の考察対象からははずした。

- Gedachtes*, Stuttgart 1891 [以下、Lanckoronsky と略記。]
- ⑥ Franz-Ferdinand, Erzherzog von Österreich, *Tagebuch meiner Reise um die Erde 1892-93*, Vienna 1895-96 [以下、Franz-Ferdinand と略記。]
- ⑦ Hesse-Wartegg, Ernst v., *China und Japan: Erlebnisse, Studien, Beobachtungen auf einer Reise um die Welt*, Leipzig 1897 [以下、Hesse と略記。]
- ⑧ Fischer, Adolf, *Bilder aus Japan*, Berlin 1897 [ただし、本稿では次の邦訳を用いた。『明治日本印象記——オーストリア人の見た百年前の日本』金森誠也 / 安藤勉訳、講談社、2001年。以下、フィッシャーと略記。]
- ⑨ Müller, Josef, *Eine Reise nach China und Japan*, Vienna 1898 [以下、Müller と略記。]
- ⑩ Eisenstein, Richard v.u.z., *Reise über Indien und China nach Japan*, Vienna 1899 [以下、Eisenstein と略記。]
- ⑪ Wattmann-Maelcamp-Beaulieu, Ludwig Frhr.v., *Letzte Reise eines 81jährigen nach Amerika und Japan*, Vienna 1909 [以下、Wattmann と略記。]
- ⑫ Pick, Emil G., *Reisebriefe eines österreichischen Industriellen aus Abessinien, Indien und Ostasien*, Prag 1911 [以下、Pick と略記。]

個々の旅行記についてはパンツァーが簡単な解説を付しているが、幾分不十分な点もあるので、それを補足しながら、それぞれの書物について順次紹介しよう。

①のシェルツァーの書物は、オーストリアが1869年に派遣した東アジア使節団の報告書である。同使節団は各国を歴訪した後、日本においては通商条約を締結し、国交を樹立した。したがって、本書には中国など日本以外の国についての記述も多く含まれている。本書は専門的な商事情報を提供することを趣旨としており、交通・輸送、通貨・信用制度、保険、貿易品などについて詳細に説明するかたわら、日本の絹生産や関税制度など個別テーマについてレポートも数点載せている。ただ、報告書という性格上、旅行記的な物語性は皆無である。

②のヒューブナーは各国大使を歴任したオーストリアの元高級外交官であり、1871年に世界周遊の途上、7月末から10月初まで2ヶ月強日本に滞在した。本書は彼が世界周遊の記録として著したもので、刊行後ベストセラーとなった。元来はフランス語で書かれたものだが、他国語にも翻訳された。ドイツ語版が出たのは1874年である。

著者は滞日中、東京、横浜はもちろん、富士山麓から相模方面、さらには京阪神から長崎まで精力的に動き回った。その間には、明治天皇に謁見したり、木戸孝允、大隈重信、板垣退助ら政府要人も会っている。岩倉具視や三条実美には自邸に招かれて懇談した。本書でヒューブナーは、日記形式でその間に見聞した事物を詳細に記録し、また自らの感想や意見を細かく書き記している。一例として京都滞在中の9月23日の記述を見ると、著者はこの日、御所、金閣、北野などを1日で見て回っており、その記述は16頁にも及ぶ。だからといって、記述が雑なわけではない。総じて彼は、日本の事物について正確に理解し、的確に描写している。

③のドープルホフは外交官を辞した後、文筆家になった人物で、1873年から翌年にかけて東アジアを旅行した。日本には1874年3月上旬から4月中旬まで1ヶ月強滞在した。本書は全

3巻からなり、日記体で日々の出来事を記してあるが、日本滞在記はそのうち第3巻冒頭にあたる。彼の旅程はいささか変わっていて、まず長崎に到着するが、ほとんどこれを通過同然にして、東に向かう。関西では神戸を拠点にして、大阪も観光するが、その足どりは慌しく、すぐに関東に向かい、滞日期間の大部分を横浜、東京で過ごしている。したがって、彼は京都を見ていない。一つには、ドーブルホフは元来、日本に半年近く滞在する算段だったのが、体調不良などの理由で大幅に予定を早め、滞在を切りあげざるをえなかった、という事情がある。ただ、後段でふれるように、あながち体調だけの問題でもなかったのではないと思われるふしもある。

④のダイヒハマーは、実業家として財をなした人物で、引退後に世界旅行を企て、その一環として日本を訪れた。パンツァーは、彼の訪日を1877年のこととしているが、本書を読むかぎりでは訪日時期、滞在期間ともに不明である。本書は、旅行記というより、日本商業案内という趣が強い。日本の記述についても、地勢・人口から始まって、通貨制度や度量衡に説明が及び、さらには経済・資源などについて説明を加えるという体裁である。逆に、著者個人の体験はほとんど記述していない。それというのも、本書は、東アジア・太平洋地域でのオーストリアの経済進出が他国に比べて出遅れているのを不満に思う著者が、世論を啓蒙するために書いたものだからである。現に、世界旅行とはいいいながら、ダイヒハマーの足跡は、日本を含めてアジアに偏っている。

⑤のランコロンスキは、1889年の5月末から1ヶ月日本を訪れた。東京、横浜に京都、大阪という標準的なコースをたどっている。日本での見聞について彼は100頁以上も割いており、量的には不足はないものの、意外に内容は乏しい。というのも、ランコロンスキは総じて旅先での体験や事物を淡々と描写するのに終始しており、おりおり自らの感想や意見をそこに挟むけれども、立ち入った論じ方はしていないからである。また、日本社会や日本人の生活についても関心が薄かったらしく、あまり取りあげられていない。

本稿でとりあげる旅行記の著者でもっとも有名なのは、⑥のフランツ・フェルディナント大公である。いうまでもなく、オーストリアの皇太子であり、1914年にサラエヴォで悲劇の最期を迎える人物である。彼は1892年から世界周遊の旅に出て、日本には同年8月に20日あまり滞在した。長崎に上陸し、京都、奈良に立ち寄って東京、横浜に至っている。もっとも、この書物がどの程度皇太子自らの手になるものかは疑問である。本書は旅行日記の体裁をとっているが、日本についての記述は約150頁にも及ぶ。しかも、人口や面積など、統計的数字も多く盛りこまれている。各地で日本側の歓迎行事に出席したり、その他種々の日程をこなしたりするなかで、皇太子がこれらをすべて執筆をしたとは信じがたいのである。

一方、皇太子ならではの、の観があるのは日本の皇族との会見の記録である。ヒューブナーや後述のヘッセ、アイゼンシュタインも明治天皇に謁見しているが、文字通り「謁を賜る」類のもので、短時間で形式的なものにすぎない。しかしオーストリアの皇太子となれば、日本側の扱いは当然変わってくる。彼は、天皇をはじめ、北白川宮など皇族と再三会談・会食している。天皇とは、駒を並べて軍の閲兵を行ったりもしている。本書からは、天皇や皇族との会話の内容や会食の雰囲気が見え、その意味で明治期の皇室の内幕を示す興味深い史料ともなっている。

のである。なお、彼の訪日については、クライナーの近著にも言及がある<sup>(5)</sup>。

⑦のヘッセの著作は、本稿で取りあげる旅行記のうち、著作としてもっともまとまったものである。著者個人については、ウィーン生まれの旅行記作家という以外、あまり明らかではない。訪日時期もはっきりしない。ただ、記述内容から判断して、1890年代中葉のことと推測される。日記体ではないので、著者の足跡ははっきりしないが、日本各地をめぐることは内容から分かる。また滞在期間も詳らかではないが、ある程度は長く日本にとどまったものと想像される。というのも、ヘッセは、庶民の日常や社会生活についてかなり立ち入った観察を行っているからである。駆け足の旅行者では到底できない業である。著者が日本に強い関心をもっていたことは間違いない。本書ではかなり詳しい統計的数字が出てくるし、また日本の文学に関する箇所、為永春水や十返舎一九の名前が出てくる (Hesse: 459, 462) のはその証拠である。

⑧のフィッシャーは、1892年に世界旅行の途上で日本に立ち寄り、強く関心を惹かれた。そして、その後何度も訪日しては、東洋美術に造詣を深めていったのである。やがて、彼は専門的な研究者となり、後にはケルンの東洋美術館設立に尽力し、その初代館長になった。

本書は著者の最初の2回の訪日経験をまとめたものである。旅行日記の体裁はとらず、テーマごとに日本の印象をつづったエッセイ風の著作である。日本に専門的な関心があっただけに、京都、奈良はもちろん、伊勢、鎌倉、東北、北海道など各地を見回ったことが内容から窺える。ただ、一部はフィクションもあるようで、たとえば子を失って出家したという虚無僧との会話 (フィッシャー: 228ff) などは、いかにもその感じがする。書物の性格上、論述というよりも描写のほうに力点があり、そのため正面きって日本を論じる箇所はない。日本の演劇を紹介する節では近松や団十郎にふれるなど、さすがに日本知識は詳細かつ正確である。

⑨のミュラーは、パンツァーによるとシュレーゲン生まれの若い神学生で、1997年に3ヵ月ほど東アジアを旅行した。そのうち、日本には10日間滞在し、駆け足で京都や神戸も回っている。

⑩のアイゼンシュタインは元オーストリア陸軍元帥という輝かしい経歴をもつ人物で、1898年に4月上旬から5月上旬までちょうど1ヶ月日本を巡遊した。本書は、その旅行における日々の出来事を記録したものである。彼は神戸に到着した後、京都を含めて関西をみ、その後東京、横浜へ赴いている。そして再び、神戸へ戻り、そして下関から離日した。著者は、オーストリアの国民がもっと国外に出て見聞を広めるべく、その刺激の意味で本書を書いた (Eisenstein, 1) と述べているが、読者の参考になるようにというので、所持品のリストなど旅行準備についても詳しくふれている。また、文中頻繁に金銭の話が出てくるのも、同様の趣旨からだろう。

異色なのが⑪のヴァトマンである。書物の副題にもあるとおり、著者は81歳の老人であり、その高齢でアメリカと日本への旅行を思い立ったのである。彼は、1908年の夏に1ヶ月弱日本に来ている。もっとも、旅行の疲労が災いしたのだろう、ヴァトマンは帰国後本書をまとめている最中に急死した。したがって、本書は前半部分は著者自らの手になる論述だが、後半部分は彼が旅行途中で記した日記や家族に送った手紙をそのまま再録している。幸いなことに、日本関連の部分は前半部分に入っており、著者の日本観をまとめた形で知ることができる。

---

(5) J・クライナー『江戸・東京の中のドイツ』安藤勉訳、講談社、2003年、166頁以下。

ただ、日本論の箇所には旅行記的な色彩がまったくなく、著者がいつどこへ行き、何を見たのかなどについての具体的な経緯はいっさい不明である。また、読者のわれわれとしては、81歳の老人が日本でどんな体験をしたのか大いに関心がかき立てられるが、残念ながらそうした珍妙な異国体験談もまったく見出せない。

⑫のピックは商人・実業家で、1909年秋に旅行の途中に来日した。しかし、その滞在はきわめて短期だったようであり、横浜と東京を垣間みたとどまっている。本書は本稿で取りあげる日本旅行記のうちでは、もっとも短い。本書のうちで日本関連の記述は11月5日の記事だけであり、分量としてもたった3頁である。

### 3. 分析素材の特徴と問題点

以上の素材は、日本観という包括的テーマを論じるには決して量的に十分なものではない。ただ、この時期のオーストリア人著者による日本旅行記のうち、主だったものはほぼカバーしている。もちろん当時、オーストリア人の間でも、在日公館関係者を中心に、長期の滞日経験をもつ者はいたわけだが、日本での生活体験を著作にまとめた者は残念ながらいなかったようである。つまり本稿は、第一次大戦以前の時代に日本を直接見聞きしたオーストリア人が書き残した記録——さしあたり、新聞・雑誌を度外視するとすれば——のうち、相当部分を押さえていると見てよいだろう。

これらの旅行記に共通する特徴を考えておこう。まず、著者はいずれも旅行者として日本を訪れた。訪問回数は、フィッシャーを除いて全員1回だけである。滞在期間は、長い者でも数ヶ月、短い者ではわずか1週間ほど、という程度である。社会的地位という点からみると、彼らには明瞭な特徴がある。すなわち、圧倒的に社会上層に属する人々なのである。職業をみると、外交官や裕福な商工業者というところが目立つ。職業が不詳の場合でも、名前に貴族称号をもつ者が大部分である。そのきわめつけは皇太子フランツ・フェルディナントである。

むろん、このことはさほど異とするにあたらぬ。当時、遠く極東まで旅行するには多大の資力を要したのであり、したがって裕福な上流人士でなければとうてい不可能であった。それに、異国体験を記録として書き残すには、一定の教育水準も前提となる。当然、船員や商社社員などとして来日した者も当時いたはずだが、彼らの手になる滞日記がないのは不思議ではない。もっとも、このような執筆者の社会的偏りは、一応われわれの脳裏にとどめておかなければならない。どのような社会的・職業的立場にあるかは、当然ながら、当の人間の日本観に影響するからである。

これらの著者たちはなぜ日本を訪問し、またなぜその記録を残したのか。その際注意しておくべきことは、当時の旅行手段からして当たり前のことながら、彼らは日本だけを選んで訪問したのではないことである。船旅では、目的地に着くまでに頻りに寄港せざるをえない。だから、日本訪問を世界周遊や、あるいはアジア諸国探訪のプログラムの中に組みこむのは当然のことであった。

したがって、日本を訪れたといっても、日本への関心度は著者によって異なる。元来さほど

の関心があったわけではないが、船便の関係でどうしても——あるいは、ほんの少し足を伸ばすだけで立ち寄れるというので——日本に立ち寄ることになったという著者もいたろう。他方、何としても日本はみておきたいという積極的な動機に動かされて来日した者もいたのである。つまり、訪日については、消極、積極の二つの立場が考えられるわけである。

この点を勘案しておくことは重要である。というのも、およそ対外認識は何らかのバイアスを前提とするからである。未知のものには、人間は通例、拒否的な対応をするか、あるいはせいぜい無関心を示すのみである。この場合、外部の事物は、そもそも認識の網の目にかからないことすらある。逆にいえば、対外的関心は、外部のものが(プラスであれ、マイナスであれ)何らかの積極的価値をもっているという観念があって初めて存在するのである。とすれば、著者たちが日本に向けて出発する前に、どんな観念をもっていたかは決定的に重要である。消極的な事情で訪日した人間が、日本にそう強い印象をもたなかったとしても当然なのである。

もっとも実際には、それぞれの著者がどういう関心で来日したかは、すべて明らかにできるわけではない。むしろわれわれとしては、残された彼らの記録をみて、その精粗や多寡から逆に遡って彼らの関心の有無を忖度するという論法に陥ってしまう危険はある。また、積極派だから、あるいは逆に消極派だからといって、彼らの発言をそれぞれどの程度割り引いて解釈すべきかは一概には言えない。そのことを踏まえながら、個々の著者をみてみよう。

さて、明らかに積極派に分類できるものとしては、シェルツァーがある。日本との通商条約の締結を目的として来訪したのだから、当然である。もっとも、商業的調査という即物的関心以上に、彼が親日的感情をもっていたかは不明である。同じことは、ダイゼンハマーにもあてはまる。アジア・太平洋地域でのオーストリアの通商を開拓したいという著者の意図からすれば、日本は訪問地として欠かせなかったはずである。ただ、彼の場合も、それ以上の関心があったかどうかは疑問である。

旅行の主目的地が日本だったことが明らかなのは、ドーブルホフ、フィッシャー、アイゼンシュタインである。ドーブルホフは、日本への憧憬から旅行を思い立ったと記している (Dobhoff: vol.1, 11) し、アイゼンシュタインは日本を最終目的地である日本滞在を1ヶ月とまず定めてから、全体の旅程を立てている (Eisenstein: 4) し、天皇に謁見した際には、日本という国が興味深いのと、日清戦争で勝利した日本軍をみたいので訪日したと述べている (Eisenstein: 111)。日本美術の研究に来たフィッシャーはいうまでもないだろう。また、ヴァトマンも、日本が主たる目的だったかどうかはさておき、訪日の動機が明確である。彼は、日露戦争に勝利した日本に親近感をもち、その国を実地にみたいと思ったと明記している (Wattman: iii)。したがって、彼も積極派である。

日本に対する愛着で際立っているのはヒューブナーである。たしかに彼は、なぜ日本を訪問先に選んだのかは明記していない。しかし、すでに紹介したような旅行記録の詳細ぶり、また随所に記されている日本の事物への肯定的評価は、日本への思い入れを物語って余りある。同じように、ヘッセも親日心情が明白である。そうでなければ、かくも詳細な日本知識を習得したはずはないだろう。もっとも厳密に言えば、この両者の場合には、われわれは先述の意味で、関心の有無を逆算している可能性はある。訪日に先立って彼らが日本にどのような関心をもつ



ていたのかは不明だからである。

一方、消極派の最たるものはミュラーである。その著書のなかには、訪日の動機は記されていないが、彼の東アジア旅行の旅程がそれを明白に示している。先に紹介したごとく、中国では2ヶ月半費やしながら、日本滞在はわずかに10日である。日本に積極的関心があれば、こうした旅行計画は立てまい。ピックについては、判断材料は乏しいが、同様に消極派だとみてよいだろう。

ランコロンスキについては判断を下しがたい。その口吻は総じて日本に肯定的だが、といって積極的関心を窺わせるというほどのものでもない。フランツ・フェルディナントは、クライナーによると、健康上の理由から世界周遊を企て、その途上で——おそらく一種の政治的配慮もあって——日本に来た。少なくとも、積極派ではないとみてよい。もっとも、彼は日本滞在をそれなりに楽しんだようで、たとえば箱根の宮ノ下で終日雨に降り込められたときには、いろいろ悪戯っぽいことをしている。たとえば、自ら浴衣を着て写真を撮らせたり、側近に日本風の礼儀作法をさせてみたり、さらには刺青師を呼んで、4時間もかけて自分の左腕に竜の彫り物を彫らせたりしたのである (Franz-Ferdinand: vol.2, 382)。

さて次に、これら旅行記のもつ、史料としての問題点を考えておこう。というのは、「オーストリアの対日観」を明らかにするための素材としては、異論を挟む余地がないわけではないからである。

著者たちの現地日本での見聞や行動は、決してオーストリアという枠におさまるものではなかった。彼らのなかにはヒューブナーのごとく、日本にいる間、イギリスの公使館に滞在し、イギリスの外交官と行動をともした者もいた。当時、オーストリアからは日本との国交樹立にともなって弁理公使が赴任したばかりで、在日公館は態勢は整っていなかった。日本各地を実際に周遊するとなると、他国の支援に頼らざるをえなかったわけである。しかし、イギリス側の情報に依存するなら、そこに含まれるバイアスにも当然、染まらずにはすまない。だいたい、ガイドブックからしてそうであった。当時、ドイツ語版の日本ガイドブックはまだ存在しなかったらしい。オーストリアの旅行者たちが頼ったのは、主としてイギリスの旅行ガイド『マリー・ハンドブック』Murray's Handbook だったと思われる<sup>(6)</sup>。ヘッセやアイゼンシュタインがこれを携帯していたことは、彼ら自身が明記している。

当の旅行者にしてみれば、現地での見聞に便利でありさえすればよいのであって、別にドイツやオーストリアの枠にこだわる必要がないのはいうまでもない。しかし、われわれにとっては、こうした情報ルートに依存した彼らの日本観察が、いったいどの程度「オーストリア的」だったのかは議論の余地がある。もっとも、だからといって、これ以外に史料となりうる日本観察

---

(6) 正式の名称は、A handbook for travellers in Japan by Basil Hall Chamberlain and W.B. Mason である。『マリー・ハンドブック』は、ロンドンのマリー John Murray 社が1836年に刊行を始めた旅行ガイド・シリーズである。ガイドブックといってもかなり詳細であり、たとえば1891年に出た日本ガイドの第3版では、450頁強の厚さのなかに日本国内を65ルートに分けて解説している。ちなみに、ドイツで旅行ガイドとしてもっとも有名な『ベーデカー』Baedekerは、『マリー・ハンドブック』を、内容・構成から表紙など体裁にいたるまで模倣して生まれたものであった。Cf. Gabriele Knoll, „Reisen als Geschäft: Die Anfänge des organisierten Tourismus“, in Hermann Bausinger/Klaus Beyrer/Gottfried Korff (eds.), *Reisekultur: Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*, Munich 1991, p.342.

記は存在しない。それに、これらの旅行記が当時のオーストリアで日本イメージを形成するうえで大きな役割を果たしたことも事実である。だとすれば、むしろオーストリアの日本観には、ある程度の英米の影響がそもそも本質的に含まれていたと理解しておくべきであろう。つまり、少なくとも一次的な現地情報ルートにおいて、それは英米の影響を前提にしたものだったのである。

#### 4. ジャポニスムへの惑溺

さて、これらの日本旅行記から、どのような対日観がみてとれるだろうか。結論を先取りしていえば、著者たちの日本イメージの基調をなしているのは、ジャポニスム的な異国情緒への憧憬である。つまり、エキゾチックな東洋の国というイメージが彼らの日本観なのである。

それをもっともよく物語るのは、工芸や骨董への異常なばかりの関心である。著者たちのなかには、和風建築を賛嘆する者が多い。京都の社寺仏閣には賛辞を惜しまないのである。ただ、日本的なものへの賛嘆は工芸・骨董においてもっとはっきり表れる。建築物と違って手軽に接することができ、また買い入れることもできるからである。だから、日本趣味の珍物漁りに精を出している著者が少なくない。暇さえあれば、工芸・骨董関係の店（当時は、Curio Shopと呼ばれた）に通うのである。

ヒューブナーも工芸品に魅了された一人である。彼にいわせれば、京都の伝統工芸の職人は「製造者などではなく、むしろ芸術家」なのである (Hübner: 408)。彼は、日本の美術について専門的な考察を行い、建築、彫刻、金・銅細工、絵画の4つのジャンルを取りあげて、その特質を論じている (Hübner: 432ff.)。ヘッセも同様である。彼は、長崎に来て、憧れの薩摩や唐津の陶器、絹織物、刺繍、武具などをみて感動する (Hesse: 355f.)。神戸に来ると、ここは横浜ほど外国人が多くないので、まだ漁りつくされておらず、いい品物が残っていると喜ぶ (Hesse: 364)。

日本最員のヒューブナーやヘッセが工芸品に傾倒するのは自然かもしれない。しかしたとえば、日本での日々を淡々と描くだけのランコロンスキも、こと社寺建築や工芸品となると俄然熱心になる。とくに後者については、京都はもちろん、東京でも大阪でも買い物に多くの時間を費やし、とくに、絹呉服、掛物、絵つき和傘などを買い集めている (Lanckoronsky: 336, 340, 360, 379)。著書のなかでも、日本の工芸品について長々と蘊蓄を披露するのである (Lanckoronsky: 336ff.)。フィッシャーは、日本での買い物について自らはあまり記していないが、しかしやはりしきりに美術品を蒐集していたことが、彼の妻の記録から分かる<sup>(7)</sup>。もっとも、フィッシャーの場合、将来の美術館建設が念頭にあったため、もっぱら古美術品が対象であった。それに、安手の工芸品では、彼の専門的な鑑賞には耐えなかつただろう。

フランツ・フェルディナントも各地で工芸品買いに執心している。買い物の様子、値段まで記しているほどである。離日を目前にした横浜では、彼はお忍びで自由に買い物をしたいと思い、日本側に護衛を外すよう要請した。ところが、日本側当局は頑として聞き入れない。何しろ、

---

(7) F・フィッシャー、前掲書、51頁。

1年ばかり前にロシア皇太子への暗殺未遂事件（大津事件）があったばかりである。ヨーロッパ大国の帝位継承者の身にまた何かあっては、と考えるのも無理はない。そこで、皇太子は警護をまくため、ホテルの裏口から別の人力車に飛び乗るのだが、すぐに日本側にみつかってしまう。それでも彼は、何とか横浜で買い物、という素志は果たしたのである (Franz-Ferdinand: vol.2, S.411)。

ところで、本稿で取りあげた旅行記著者のうち、ドーブルホフは特異なケースである。ヒューブナーやヘッセを筆頭に、日本への関心をもって訪日した者は、日本への偏愛を募らせるのが通例だが、彼は逆に現実の日本を目の当たりにして失望、幻滅したのであった (Dobhoff: vol.3, 125)。その理由や経緯は、あまりはっきりしない。しかしともかく、その彼にしても、工芸品となれば、やはり各地で買物に——むろん、それほどの情熱をもってではないけれども——時間を費やしているのである。

日本女性への関心が高いのも特徴的である。むろん、著者がいずれも男性だったという事情もあるが、まずは日本趣味の表れと考えてよいだろう。つまり、ロチ Pierre Loti の小説の主人公「お菊さん」(1887年)のイメージである。この点をもっとも雄弁に語っているのは、ヘッセである。彼は自らの旅行記の日本の章を、いきなり「お菊さん」の話で始める。彼にとっては、この女性こそエキゾチックな異国日本を体現するものだったのである。彼は、これを実在の女性と思いきり、何とかして会いたいと長崎じゅうを尋ねまわる。そして、人からフィクションの主人公にすぎないと聞かされて、ひどく落胆するのである (Hesse: 358)。それでも、彼の日本女性への憧憬はやまない。その服飾や化粧について、わざわざ1章割いているし、京都の舞妓・芸妓についても同じように1章あてている。

これに対し、フランツ・フェルディナントは日本女性に否定的である。すなわち彼によれば、生身の日本女性は実際に観察してみると、まるで人形のように生気がない。単に外観が魅力的なだけなのであって、巷間行われている賛美は明らかに行きすぎだというのである (Franz-Ferdinand: vol.2, 287f.)。また、他の面では日本に心酔するフィッシャーも、この面では意外に辛口である。彼にいわせると、日本女性は人格的内容を欠いており、その意味で生活を飾る装飾品でしかない (フィッシャー: 365)。

このように、日本女性については賛否両論があったように見える。ところが実は、根本において、双方の立場は決して相矛盾するものではないのである。ロチの「お菊さん」は、西洋人の理解を越えた神秘的で不可解な存在として描かれている。つまり、彼女はその意味で、人格や内面をもたない人形も同然である<sup>(8)</sup>。とすれば、賛否二つの立場は、人形のごとき女性を肯定するか否かという差異があるだけで、結局はそれぞれに「お菊さん」的ステレオタイプを前提にしているわけである。

もっとも、日本女性への憧憬がさらに昂じる場合には、このような陰翳はしばしば脱落して、単純な賛美論に脱線したようでもある。ダイゼンハマーなどは、日本女性の外観・内面にわた

(8) 和田章男「ピエール・ロチ『お菊さん』——日本イメージ形成の物語」懐徳堂記念会編『異邦人の見た近代日本』和泉書院、1999年、12頁、内藤高『明治の音——西洋人が聴いた近代日本』中央公論社、2005年、72頁。

る美質を列挙して倦むところがない。すなわち、陽気で礼儀正しく、機知と理解力に富んでいて、そのうえ愛らしく、母性愛に溢れているのである (Deisenhammer: 503)。

異国趣味に浸るといえるのは、一種の現実逃避にほかならない。身の回りの現実の醜悪さに嫌気するあまり、仮構の世界に逃れようとするのである。現実に対置されるものとして、仮構世界は徹底的に美化される。だから、日本趣味をもつ者にとって、日本は美と幸福の支配する、いわばお伽話の国なのである。

日本を別世界として祭りあげる姿勢は、これらの旅行記には頻繁に現れる。フィッシャーは典型である。彼にいわせれば、日本人は礼儀正しく、上品である。社会の底辺に属する人々でさえ、清潔、優雅で、しかも「きわめて騎士的」である (フィッシャー: 46f., 183)。ランコロンスキもこれに同調する。彼は「地球上に日本人ほど幸福な民族はいない」と断言する。日本には社会問題もないし、それにそもそも身分間の格差が小さい。「洗練された慣習とすばらしい生活様式というみごとな紐帯によって、人々は身分の上下を問わず、結びつけられている」からである。ともかく、日本には、およそ人間的悲惨なるものは存在しない。苦難に見舞われたとしても、日本人は持ち前の快活さでもって、それを軽やかに片付ける術を心得ているからである (Lanckoronsky: 338f.)。ヒューブナーも同意見である。日本人は憂いや不機嫌というものを知らないらしい、と彼はいう (Hübner: 267)。憂いがないという意味では、日本はこれら欧米の心酔者にとって、本来の意味でのユートピア (無憂郷) なのである。

快活で陽気という評価は、今日の通念的な日本人観からするといささか奇妙に聞こえるかもしれない。しかしこの時代、気質的には日本人はイタリア人など南欧人と通じるとみるのは、むしろ一般的な理解であった。だから、ダイゼンハマーが次のようにいうのも奇妙ではないのである。「世界で日本人ほど娯楽と社交的楽しみが何たるかを弁えている民族」はない。「日本人は、人生という仮装祭列が死によって終了するまで、笑いと言談を忘れることはない。」 (Deisenhammer: 551) ドーブルホフも、日本人の性格を評するのに、「子供のごとき快活さ、陽気さ」という形容を使っている (Doblhoff: vol.3, 35)。

日本は、彼らにとっては、いわばこの世のものではないがゆえに美しく映じた。逆に、日本の姿が現実と交差する途端に、お伽噺のヴェールは脱げ落ち、彼らの陶醉は止んでしまう。明治の欧化風潮は、日本を産業的近代という現実界にひきずり下ろすものとして、彼らがこぞって指弾するところであった。過ぎた酩酊への後味の悪さも手伝ってか、これを難じる彼らの筆は相当辛辣である。ヒューブナーは欧化論者を評するにあたって、皮相にして軽率、と一刀両断である。留学帰朝者の洋服姿にいたっては、「猿真似」にも等しいという (Hübner: 448, 353)。

むしろ、彼らが一面的な美化に走ったのは、往々にして誤った事実把握をしていたためでもある。彼らの誤りは、数えあげればきりがない。ヴァトマンは、日本人は道義心に富んでいるから、たとえば官吏は清廉で汚職と無縁だし、また不貞も同性愛もないという。加えて彼の言うところによれば、日本には婦女売買はなく、泥棒はいるけれども、乞食はいない (Wattman: 50, 53, 58)。ミュラーは、日本では婚姻は大半が期限付きだという (Müller: 103)。ダイゼンハマー

---

(9) Mathias-Pauer, *op.cit.*, p.138.

は、日本の伝統的調味料として醤油とならんでカレーを挙げる (Deisenhammer: 507)。

ただ、日本知識が間違っていること自体は、さほど問題ではない。言語の障害があるうえ、しかも時間的に限られた滞在では、錯誤に陥っても当然だし、あるいは断片的な知見から性急に一般化したために、一方的な論断に陥ったりするのやむをえない。問題なのは、誤った知識であれ、不完全な理解であれ、それを日本を美化し、別世界に祭り上げる方向へと収束させる姿勢なのである。ヒューブナーの言はこうした姿勢を言い尽くして余すところがない。彼が富士吉田で神社の祭礼を見聞したときの言である。「これらすべては現実だろうか。それとも夢なのだろうか、理想的な世界、魔法のお伽話なのだろうか。」 (Hübner: 279)

## 5. 世紀末ウィーンの日本趣味

19世紀後半、ジャポニズムは全ヨーロッパ的な風俗・文化現象であった。それを考えれば、これらの著者たちの日本観は別段特異なものではない。ただ、たとえばヒューブナーの旅行記を通読するとき、この元高級外交官が日本趣味に浸りきっているのをみて、やはり一種の違和感は禁じえない。読者としては、自国の国益という観点から日本を捉える観点が少しくらいあってしかるべきではないかと問いたくなるのである。

他のヨーロッパ諸国に比べてオーストリアにおけるジャポニズムがことに強かったのかどうか、筆者には判断する用意がない。ただともかく、19世紀後半の当時、ウィーンでは日本趣味が目だった風俗現象だったことは間違いない。その契機となったのはウィーンの万国博覧会であった。日本からの出展が入場者の大人気になったのである。

ウィーン市外のプラーター緑地を会場として1873(明治6)年5月に開幕した万博は、この種のものとしては1867年のパリについて、第5回目にあたる。日本はオーストリア側からの出展参加の働きかけに応じ、佐野常民を長として80人という大規模な派遣団を送り出した。<sup>(10)</sup>日本は、会場に建設された「産業宮」の東棟に展示場を設けた。入口には名古屋城からわざわざ移送した金のシャチホコが据えられ、さらに別の一角には紙で作った鎌倉大仏が鎮座しているという雰囲気である。また、高さ3メートルを越す大提灯や、見あげんばかりの大太鼓、さらに谷中の五重塔のレプリカなども大いに人目をひいた。展示物の大部分は、日本の工芸品であった。たとえば、繊維・服飾工芸のセクションでは、絹織物、刺繍、金箔織込などを展示する一方、機織の実演を行った。また、漆器や金属器も出展された。<sup>(11)</sup>

屋外の「東洋庭園」には、日本庭園も設営された。庭園といっても、神社の境内を模したもので、入口には鳥居が立っており、それをくぐると道の両側には売店が並んでいる。種々の工芸品などを売る店である。さらに進むと、小さな池があり、滝が水を落としている。池には太鼓橋が掛かっていて、それを行くと、奥には伊勢神宮を模した小さな祠があり、巫女による神楽舞が披露された。<sup>(12)</sup>

(10) 派遣の経緯については、Reinhold Lorenz, *Japan und Mitteleuropa: Von Solferino bis zur Wiener Weltausstellung (1859-73)*, Vienna 1944, chap.8.

(11) 角山幸洋『ウィーン万国博の研究』関西大学経済・政治研究所、2000年、33頁以下。

(12) Herbert Fux (ed.), *Japan auf der Weltausstellung in Wien 1873*, Vienna 1973, p.21.

日本の展示は、このように純和風を強調したものであった。これが、ウィーンっ子の間で熱狂的な反響をよんだのである。とくに人気の的となったのは日本庭園であった。その開園式は、万博開幕後まもない5月5日に行われたが、この日会場を訪れた皇帝フランツ・ヨーゼフ Franz Josef が皇妃エリーザベト Elisabeth とともに、それに親しく臨んだのであった。その後も、日本庭園は、これを一目みようとする観客が引きもきらないありさまであった。当時のある証言にいわく、「ここでは、群集が・・・押し寄せ、しかもだれもが、扇だとか茶椀、あるいはその他何がしかの物を買わずには立ち去ろうとしない。・・・日本人は東洋人のうちで、もっとも文化的に高度で、好感に値する人々だとみられるようになった」<sup>(13)</sup>のである。

日本人気は、売店の盛況によく現れた。とくに人気が高かったのが団扇である。文字通り飛ぶような売れ行きで、いわば万博入場者のシンボルと化していたという<sup>(14)</sup>。そのありさまを目の当たりにしたのが、折しも訪奥中だった岩倉使節団である。その報告書は、万博での和風小物の売れ行き具合について、以下のような記録を残している。「尤モ多ク売レタルハ、小切レト扇子ニテ維納ノ人気、此場ニ入りテ、日本ノ物品ヲ買テ帰ラサレハ、人ニ対シテ緊要ノ珍ヲ遺却セル如キ思ヒヲナシ、競フテ群リ来リ、其間ヒ一方ナラス」<sup>(15)</sup>

万博会場とはそう遠くないところに、日本風の茶屋も誕生した。オーストリアの商人が日本からわざわざ建築資材や調度を取りよせて開業したものである。若い日本娘が3人、お茶や酒の接待をし、ときには三味線で歌を披露するというので、これがまた大いに話題となったのである<sup>(16)</sup>。

万博会場での流行が、さまざまな形をとって、当時のオーストリアの風俗・趣味に影響を与えたことは想像に難くない。たとえば、ウィーンのユーгент様式に日本的要素が強く影響したのは、万博の影響だったという<sup>(17)</sup>。実際、貴族や有産市民は競って日本の工芸・骨董品を収集し、サロンを飾りたてた。そして、日本趣味の流行は、意外に長く尾を引いたのである。たとえば1901(明治34)年、ウィーン社交界の花メタニヒ Metternich 侯夫人が、日本風の花見の会を開いた。花見といっても、万博の会場だったプラーター緑地にわざわざ茶屋や寺社など日本風の建物を建てさせるという、ずいぶん大掛かりな催しである。花見の会はたいへんな人気を博し、多いときには1日に5万人以上が来場した<sup>(18)</sup>。

翌年2月には、川上音二郎・貞奴一座がウィーンに来ていた。彼らは前年の秋よりドイツ各地で巡回公演を行い、さらにオーストリアにも足を伸ばしたのである。出し物は、安珍・清姫などの筋を西洋人好みにアレンジした和風の演劇であった。もっとも、演劇といっても、伴奏もないパントマイムに、場面によってチャンバラのアクション・シーンを加えた程度のものにすぎなかったようだが、これが各地で大好評を博したのである。伝統演劇の筋立てに、和

(13) *Ibid.*

(14) Lorenz, *op.cit.*, p.162.

(15) 久米邦武編『米欧回覧実記』田中彰校注、第5巻、岩波書店、1982年、52頁。

(16) Julia Krejsa/Peter Pantzer, *Japanisches Wien*, Vienna 1989, pp.35f.

(17) Jutta Pemsel, *Die Wiener Weltausstellung von 1873: Das gründerzeitliche Wien am Wendepunkt*, Vienna 1989, p.50.

(18) Krejsa/Pantzer, *op.cit.*, p.58.

服姿の貞奴の舞台姿が、日本へのエキゾチズムを刺激したのである。<sup>(19)</sup>

このように、19世紀後半のオーストリアでは、日本趣味が流行現象であった。本稿で扱った著者たちがその影響を強く受けていたのは当然であった。ただ、ヒューブナーをはじめ、彼らが日本に対してこうした文化的・風俗的な関心しかもたなかったのは、それだけではあるまい。

あわせて考えるべき点は、ジャポニズムに代わるような政治的・経済的な関心がなかったということである。オーストリアにとっては、日本を含めた東アジアにおいてこれという国益は存在しなかった。当時のオーストリアの領土的関心は、地続きのバルカン半島方面にかぎられていたのである。<sup>(20)</sup> 背景には、同国が他のヨーロッパ主要国に比べて工業化の進展が遅かったことがある。したがって、海を越えた市場の開拓や通商網の拡大に積極的に取り組む必要は乏しかった。それに、元来海軍国ではなく、したがって海外への進出を後援する軍事的力量も欠いていた。つまり、本国より遠く隔たった東アジアでは、オーストリアには守るべき既得権もなかったし、また——ごく一部の野心的な政治指導者を除けば<sup>(21)</sup>——新たに利益を追求しようという意志もなかった。だからオーストリアは、19世紀末に西洋列強がこぞって中国分割に乗り出したときにも、これも参加しなかったのである。

このように、オーストリアは日本に対して、具体的な利益をもたなかった。そこに、ジャポニズム風潮を蔓延させた背景があったと考えられる。つまり、死活の利益がかかっていないだけに、日本に対しては牧歌的な「悠長さ」が許されたのである。

## 6. 日本観の変化——暫定的結論

ただ、日本趣味への感溺は次第に薄れていく傾向にあったことには注意しなければなるまい。ここで挙げた旅行記のうちでは、アイゼンシュタインやミュラーの口吻がそれを窺わせるものである。

アイゼンシュタインは、日本への関心をもちながらも、しかしきわめて即物的である。彼の興味は、軍事と植物に尽きるといってよい。日本の陸軍にはいかなる長短所があるのかという、陸軍軍人としての職業的関心と、日本独自の植物はどのようなものなのかという個人的な趣味が圧倒的に目立つのである。彼の旅行記においても、この関連で訪れた施設や会った人物については、実に記載が詳しい。

一方、社寺の紹介などは実に淡泊である。個人的な感想を一切省いた、まるでガイドブックのごとき通り一遍の紹介に終始している。彼もまた、土産物に日本の伝統工芸を買い求めている

---

(19) 伊藤整『日本文壇史』第7巻、講談社、1996年、131頁以下、Krejsa/Pantzer, *op.cit.*, p.77; Peter Pantzer, „Kawakami Otojiro (1864-1911) und Sadayakko-Theater: Exotik und Premierenstimmung im deutschen Kaiserreich“, in Japanisches Kulturinstitut Köln, *Kulturvermittler zwischen Japan und Deutschland: Biographische Skizzen aus vier Jahrhunderten*, Frankfurt a.M.1990, p.147.

(20) G・シュタットミュラー『ハプスブルク帝国史——中世から1918年まで』丹後杏一訳、刀水書房、1989年、186頁以下。

(21) バンツァー、前掲書、146頁以下。

いる。しかし、何を買ったかという話はほとんどなく、記されているのは値段の話のみである。値段といえば、彼はその著書のなかで、各滞在地での出費をリストにして挙げているが (Eisenstein: 119f)、これなどおよそジャポニズム的な憧憬とは程遠いといわざるをえない。

ミュラーはさらにはっきりしている。彼はなるほど、日本の風景には賛辞を贈る。瀬戸内海を神戸まで航行したときのことを、彼は「この船旅以上にすばらしいものをほとんど想像できない。…思わず、『日本は美しい国なのだ!』という嘆声が出たのである」と記す (Müller: 98)。しかし、それ以外の点では、彼の日本評価はきわめて辛い。いわく、日本人は外観が小柄で醜い。何よりも、尊大で寛容さに欠ける。西洋から近代文明を学んだくせに、西洋人を居留地の狭い空間に閉じ込めているのは恩知らずもはなはだしい (Müller: 97)。日本人は模倣が上手だから、上辺はうまく洋風化したがるが、本質は愚かなままだ。皆がもてはやす日本文化なるものも、実際はそんなに大したものではない (Müller: 104)。

ミュラーの日本観でとりわけ興味をひくのは、彼が日本の脅威をひしひしと感じていることである。彼はマッチ工業を例に挙げて、日本がすでに国際市場でライバルのオーストリアを駆逐してしまったことを指摘する (Müller: 103)。ミュラーにとっての日本は、現実とは別次元にあるお伽話の国ではない。経済的存亡をかけて自国と争う現存の競争相手なのである。ここにはもはや、お菊さんへの思慕に浸る「悠長さ」はまったく感じとれない。

アイゼンシュタインもミュラーも、ここに挙げた旅行記のなかでは刊行時期が遅いほうに属し、ともに 1890 年代半ば以降である。たったこの 2 冊だけから一般化するのはむろん性急だが、それを承知であえて言えば、このころから浮ついたジャポニズム熱に代わって、客観的・即物的で、あるいは冷徹に自国の国益を意識する眼差しが徐々に現れてきたと想定してよいのではないか。

この想定が正しいとすれば、オーストリアはドイツと軌を一にすることになる。冒頭で紹介したように、ドイツでも対日イメージは 1890 年代に悪化したからである。以下、この点について若干考えておきたい。

オーストリアでの日本観の変化はどのようにして生じたのか。ドイツの場合、東アジアでの日独双方の利害衝突という、当時の国際政治状況の変化がその背景にあった。しかし、オーストリアについては、そういう意味での現実面での変化を考えることはできない。というのも、東アジアへのオーストリアの関わりは、節目となる 1890 年代半ばの前も後も、一貫して弱いままだったからである。ドイツと異なって、オーストリアは中国沿岸に海軍基地や植民地を求めたこともなかったし、対アジア貿易も相変わらず低調であった。つまり、政治的・軍事的プレゼンスの点でも経済的利益の点でも、オーストリアの影の薄さは変わらなかったのである。

このことをよく示すのは、1900 (明治 33) 年の義和団事件である。なるほど、オーストリア・ハンガリー政府はこのとき、欧米諸国の共同対中派兵には即刻加わった。ただそれは、決して列強の中国進出に割って入ろうなどという動機によるものではなかった。その折にハンガリー首相セル K. Szell が公言したごとく、同国指導者たちの念頭にあったのは国際協調を尊重する



ことだけだったのである。実際、北京在住の欧米人救出という「大義」で列強が揃い踏みするなか、オーストリアにとって出兵に参加しないという選択はありえなかったろう。<sup>(22)</sup>

日本との関係にも変化はなかった。日露戦争がおこったとき、オーストリアでは一部でジャポニズム的な日本臆病から熱狂が生じた。ただ、政府当局や言論界の反応は、総じて冷静なものだった。はるかかなたの極東での角逐がどういう結末になるかは、同国にとって大した問題ではなかったからである。戦争が関心をよぶとすれば、唯一それがバルカン情勢にどういう余波を生むかという観点からであった。ロシアは、その極東進出が頓挫するようなことがあれば、方向を転じてバルカンへの圧力を強めることが予想された。そうなれば、オーストリアとの緊張は当然高まるからである。<sup>(23)</sup>

以上のことを考えるなら、日本観の変化を現実次元に連動させるのは適当ではない。いいかえれば、政治経済面で変化が生じたために日本観もそれにつれて変化したという、一種の基底還元論的な説明はこの場合、成り立たないのである。とすれば、われわれは現実次元とは相対的に独自の、観念のレベルでの動きを考えなければならない。

もちろん、まず考えられるのは、ドイツと一つの文化圏を形成していたことである。言語が共通で、同一の歴史的伝統に属していた両国では、国民の間に相互に親近感が存在していた。それに、価値観や規範を分かちもっていれば、対外観が似通っていても不思議はなかろう。もっとも、ここでそれより重要なのは、新聞や書籍などの出版産業にとって、両国がかなりの程度、単一の市場をなしていたということである。マスメディアの誕生によって、人々の日常が情報の産業的供給に左右されるようになった近代においては、このことは決定的に重要である。ちなみに、本稿で取りあげた旅行記12点のうち、5点がドイツで発行されていることに注意したい。

ドイツは、帝国主義的競争や日本のごとき非ヨーロッパ勢力の台頭に直面した。それによって刺激されたドイツ人の危機感は、文化産業のパイプを伝って、オーストリアにも伝播したはずである。オーストリア人も、ドイツ人と同一の情報に接し、同一のバイアスのかかった外国イメージを供給された。われわれももはや安閑とはしては行れないという声は、こうしてオーストリアでも上がってきたというわけである。

もっとも、さらに視野を広げて、文化圏という枠を越えた因子を考えることも不可能ではない。というのも、こうした日本観の変化は、当時決してドイツ語圏にかぎられたものではなかったからである。イギリスでも19世紀末にアジア・イメージが変化したという東田雅博の指摘は、この点興味深い。東田によれば、それまでの肯定的なアジア観は、この時期から攻撃的なものへと変化していく。日本についていえば、西洋文明の随従者という肯定的なイメージに代わっ

---

(22) Georg Lehner/Monika Lehner, *Österreich-Ungarn und der "Boxeraufstand" in China* (Mitteilungen des Österreichischen Staatsarchivs, Sonderband 6), Vienna 2002, p.159.

(23) Tsuyoshi Ineno, „Das Verhältnis Japans zu Österreich zur Zeit des Russisch-Japanischen Krieges“, in Sepp Linhart/Kurt Schmid (eds.), *Mehr als Maschinen für Musik: Beiträge zu Geschichte und Gegenwart der österreichisch-japanischen Beziehungen*, Vienna 1990.

て、その裏のマイナス面をあげつらうものへと変わっていくのである。<sup>(24)</sup>

東田は、アジア観の変化を、大英帝国の没落への予感に苛まれるようになったイギリス人がその不安を対外観に投射したものと考えている。しかし、ドイツ語圏でも同様の傾向が認められるとすれば、その原因を特殊イギリス的な事情にのみ求めるのは適当ではあるまい。イギリスやドイツという個々の国レベルの問題というより、西洋の総体的な地盤沈下を先取りした全ヨーロッパ的な規模でのペシミズムを、そこにみてとることができるのではないか。

ヨーロッパで、日本を含む東アジアへの関心が、それまでの散発的・一時的なものから、持続的で集中したものに変わったのは、日清戦争を契機にしてのことだといわれる。そして、このような関心の変化と軌を一にして広まったのが、「黄禍」の観念だ<sup>(25)</sup>。とすれば、世紀末的憂鬱という時代の空気は、案外にアジアを見るヨーロッパ人の眼差しを左右していたのかもしれないのである。

---

(24) 東田雅博「『文明化の使命』とアジア——ヴィクトリア時代におけるインド、中国、日本のイメージ（1850年-1900年）」『思想』811、1992年、同『大英帝国のアジア・イメージ』ミネルヴァ書房、1996年、235頁以下。

(25) Heinz Gollwitzer, *Die Gelbe Gefahr: Geschichte eines Schlagwortes*, Göttingen 1962, pp.43f.